岡澤　恵子（旧姓山路）（昭和二十七年卒）

四小の時代の思い出は、板橋駅の近くに大きなガスタンクがあったこと、中山道には、お風呂屋さん、お寺、お菓子屋さん、都病院、マーケットの中の写真屋さん。

写真屋さんで親友の吉岡節子さんとゆかた姿で二人で記念写真を撮りました。

治久丸　京子（旧姓平田）（昭和二十八年卒）

転校生の私が級にもうちとけ、仲良しさんが沢山出来ましたが、昭和26、27年？に金沢小が出来、ほとんどの友が別れて行ってしまい、淋しい思いをした事を忘れません。

あの頃は、石畳の道に路面電車、部屋からは二つの大きなガスタンクが見え、夜になると板橋駅の辺りから貨物の入れ替えのガチャンという大きな音や機関車の汽笛の音を聴きながら眠っていた事等想いだされます。

板橋本通りの田中酒店、渋沢酒店、山本テーラー、横山フクさんの息子さん達、同級生の皆様いかがお過ごしでいらっしゃいますか？くれぐれもご自愛下さいませ。

柴田　敦子〈旧姓菊池〉（昭和二十九年卒）

昭和24年12月、疎開先から上京しました。

私の住んだ所は、北園高校の正門からまっすぐ都電通りを渡って下板橋へ向かう途中でした。近所はまだ壊れた建物の地下がそのまま残っており、防空壕

にそのまま住んでいる人もいました。学校は二部授業で午前の部と午後の部に分かれていました。田舎から出てきて初めて食べた給食のコッペパンがなつかしく思い出されます。

栗原　東設（昭和二十九年卒）

隣の北園高校校舎が黒かったのが印象的でした。後でわかったのですが、爆弾攻撃に遭わないよう黒く塗ったんですね。

そういえば六年のとき担任だった志村正幸先生、楽譜を見ないで後ろ向きでピアノを弾く特技があったのを覚えています。

田中　伸佳（昭和三十一年卒）

昭和18年夏、太平洋戦争の最中、私は板四小にほど近い板橋で生まれた。東京大空襲で家を焼かれ、下板橋駅付近、志村坂下と転々と移り住んだが、当時二歳未満の私には戦中の記憶はまるで無い。多分空襲警報のサイレンが鳴ると、母に背負われ、防空壕に避難したことであろう。戦後の防空壕は、幼児期の隠れん坊遊びの格好の隠れ場所であったように思う。

その防空壕のせいか、それとも父に叱られ押入れや便所（当時はトイレなどと呼ぶ代物ではなく、戦後の急ごしらえの便所は落ちたら大変なものであった）に押し込まれたせいか、トラウマとなって現在に至るまで、私は閉所恐怖症である。

今までの我が人生、決して品行方正ではないが、刑務所の独房にも絶対入りたくない。思えばこの閉所恐怖症のお蔭で罪を犯さずに来られたのかも知れない。

伯耆原　厚雄（昭和三十一年卒）

同窓会の打ち合わせに少し時間が有ったので板四小時代を含め20年間住んで居た家を見に行きました。そこには見覚えの家はなく周りはすっかり変わっていました。唯一軒、50数年前そのままの家を見つけ気持ちが和らぐのを感じました。家主さんとも再会、一目で名前が出て思い出話しをするうち、懐かしい一コマ一コマが蘇って来ました。

道路でやった野球、道路一杯に白墨で絵を描いて遊んだ事、隣のお兄さんに谷端のプールへ連れていってもらった事、買ってもらった割りばしに刺したアイスキャンディーの美味しかった事、石神井川に米軍が捨てた薬莢（やっきょう）を拾いに行き怒られた事、又、小松原家で初めてテレビ（白黒）を見てビックリ、力道山・シャープ兄弟のプロレスに夢中になった等々楽しい想い出です。同窓会に関わったが故の貴重な時間でした。縁は大事にしたいものです。

須藤　房枝（昭和三十二年卒）

正門前に三軒並んでおりました文房具店が懐かしい想い出に残っております。西澤・今井・北原文

房具店様でした。どちらの店主様も優しく迎えて下さいましたので、学校帰りの寄り道が楽しく和気あいあいと、とても良き時代を過ごさせていただきました。

北岡和夫（昭和三十六年卒）

ＪＲ板橋駅近くを流れる川っ淵にＮ君は住んでいた。今は暗渠になっているが、当時はドブ川が流れ、周りは空き地だらけだった。戦後の日本が立ち直り始め、みるみる変わっていく頃だったのだろう。

子どもの私は、Ｎ君とツルんでよく遊んだ。真っ黒い顔に目ばかりギョロギョロさせ、少し辛らつなモノ言いが面白い男の子だった。何が楽しくて、あんなに遊んだのか今思うと不思議でならない。

小学四、五年の頃、転校してきたＲ子。バービー人形みたいな髪形で、怒ると眉間にシワが寄る。いかにも気の強そうな女の子だった。五中に入って、気がついたらいなくなっていた。

あれから50年。会社から「もう来なくていいよ」と言われてから、時々子どもの頃を思い出す。Ｎ君、Ｒ子。今、どこにいるんだ。会ってみたいよ。会ってどうする。どうなるものでもない。お互いの中に“老い”を見つけて、妙な安心を得たいため？来し方の、失われた記憶の断片を掻き集め、愚かだったけど、楽しかった我が軌跡を追体験しよう、という魂胆？何でもいい。懐かしいＮ君、Ｒ子。生きているのか、それとも…。せめて消息だけでも知りたいな。今度の同窓会で。

辻　良子（旧姓川島）（昭和三十六年卒）

思い出が沢山有って、心の故里です。一年～六年、ずっ～と同じクラスで、卒業しても、ちゃ～んと下の名前で呼び合えます。私は家の都合で１年少し、宇都宮のヤナセ小学校へ転入しました。東京から来た子と言われて名前で呼ばれた事が有りませんでした。

いつしか校庭のすみのほうで一人で遊ぶ事が多くなり、家に帰っては友人が出来たふりをする様になっていました。少し経って東京に帰ってこられた時は本当に水を得た魚の様に毎日が嬉しくて、楽しくてやっぱり板四小は私にとって素晴らしい母校です。

或る時、（五年生）父が自動車事故にあった時も当時の担任の先生やクラスメイトが心配して下さいました。当時の皆の優しさが私の今の心の元になって居ます。校歌……いいですね、忘れません!!これからもこの先も、ず～とです。いつの日か、又、皆様にお会い出来る様願って居ます。

山下　正子〈旧姓宮下〉（昭和三十七年卒）

最近どこの駅を降りても、昔とすっかり変わり、お上りさん状態ですが、板橋駅はあまり変わっていないのでとてもほっとします。只、昔の商店街の活気がなくなってしまい、残念です。

板四小も新しくなってからまだ行っていないので、機会があったら是非見に行きたいと思っております。

落合　隆幸（昭和三十七年卒）

旧中山道板橋宿の現在の不動通り商店街のほぼ中央に以前は「新藤楼」といわれた遊廓があった。

私が20歳のとき、一度中に入ったことがある。三階建ての木造建築で柱が太かったことを覚えています。当時はアパートになっていました。元遊廓の建物ということもあるでしょうが、出来れば残してほしかった……。

新藤楼の門

疎開

丸山昌也（昭和二十年卒）

群馬県沼田市のお寺に学童疎開をしました。疎開から帰ってきた直後、アメリカ空軍による東京大空襲があって10万人以上が死んでいます。叔父も死にました。強烈な記憶があります。

伊藤　巌（昭和二十年卒）

間もなく85歳になりますが元気ですと申しても歯科、眼科と毎月のように通院しています。戦後70年たちましたが沼田舒林寺（じょりんじ）へお世話になり、進学のため戻りました。多々お世話になり有難うございま

した。

板橋へは5歳頃に移り住み兄の子ども達もお世話になりました。兄は学校の近くに住んでいて蝶々おじさんと言われ親しまれていました。

龍田　幹雄（昭和二十年卒）

戦争末期、米軍との本土決戦に備え、児童を安全な所へ移すことになり昭和19年8月に学童の集団疎開が始まりました。板四小は群馬県に行くこととなり、四年生以上が沼田のお寺に学年毎に分宿し、三年生は上牧と川場の旅館に入りました。

何よりも辛かったのは育ち盛りの年齢なのに食事の量が極端に少なかったことです。大豆の沢山入ったご飯一杯と肉、魚無しの野菜だけのおかずで空腹の毎日でした。「白いご飯を腹一杯食べる」事が一番の願いでした。現在のように食べ物の豊富な時代に育った児童達には「食べたくても食べる物が無い生活」は想像もつかない事でしょう。

白井　知枝（昭和二十二年卒）

皇后さまは五月二十四日、御養蚕（ようさん）所で蚕に餌となる桑の葉を与える「給桑」の作業をされたと新聞が報じた。

昭和二十年五月、集団疎開地沼田で五年生になった私は、養蚕農家へ手伝いに行った。桑畑から桑の葉を枝ごと切り取り、担ぐようにして運んだ。平らな大きい長方形のカゴの上で青白く硬くなった蚕

を、二本の指でつまんで数匹取り、古い葉に換えて新しい枝葉を蚕の上にそっと被せるように置くと、一斉に食べはじめた。この日、蚕が死ぬとこんなにも冷たくなるのかと初めて知った。……七十一年経った今も忘れられない。

岸　孝夫（昭和二十二年卒）

ラジオ体操と乾布摩擦で疎開学童の一日は始まります。終わると近くの神社での必勝祈願。一日おきに愛宕神社と諏訪神社へ二列縦隊駆け足です。参拝後は軍歌斉唱。これも一日おきに「海ゆかば水漬く屍　山ゆかば草生す屍　・・・・・・・・・」「万朶（ばんだ）の桜か襟の色　花は吉野にあらし吹く　・・・・・・」子供まで軍事一色に染められていました。宿舎金剛院に戻ると本堂へ、正座して読経。般若心経です。「観自在菩薩　行深般若波羅蜜多時　・・・・・・・・」住職が出征のため毎朝の読経を学童が行いました。一週間か十日ほどで全員が暗記でき（意味は全く不明）、一日交替で木魚や鉦をたたくリード役を務めることになりました。森下明夫君が上手かったな。

ほどなくして朝食、「兵隊さんありがとうございます。お百姓さんありがとうございます。お父さん、お母さん、先生いただきます。」の唱和を今でも覚えてます。持参したみかん箱を机代わりにした授業が本堂で行われることもありましたが、土地の学校の教室を借用しての授業が主であったように思います。

沼田小学校が火事で焼けてからは枡形小学校、沼

田中学へも行きました。食糧事情を筆頭に厳しい生活環境でしたが、それについてはいろいろと書かれているので、ここでは、学童疎開だから経験出来たことに触れてみます。

★赤城山、迦葉山、子持山への遠足（行軍と言ってました）、帰りは薪を背負って、薪の縛り方、背負い方も覚えました、

★夏の最大の楽しみは片品川での水泳。学校のプールなどない時代、皆ここで泳げるようになりました。帰りはドドメ（桑の実）で口の周りが紫色。

★冬は雪の沼田公園での橇（ソリ）遊び。自家製の橇で怖かったけど楽しかった。

★室内遊戯は小倉百人一首（時節柄愛国百人一首なるものがあったが）冬場は毎日のようにカルタとりでした。私の得意札は「天の原振りさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（阿倍仲麻呂）。女子から教わったお手玉やおはじきが流行り、複雑な技もできるようになり、女子と対等に遊べるようになりました。（中の大豆が目的で親元にお手玉送れの注文が増えました）

★檀家の農家での農業体験。草むしりや芋ほりでしたが、終わってからいただくジャガイモがおいしかった。

沼田市や金剛院とは今でもつながっています。疎開仲間が声を掛け合い団体で三回ほど訪れました。板橋区が沼田市と姉妹都市になっている関係で行われた沼田市主催の都市間交流事業「板橋区学童疎開物語」に語り部として同期生四名で参加しました

し、最近では沼田まつりの準市民交流会に十名ほどで参加しています。

◎「正午から天皇陛下の放送があるんだって」

「より一層頑張れと励ますんだろうな」

「敗けるわけないよな。最後は神風が吹くんだから」終戦の日の朝、群馬県沼田町での疎開学童の会話である。

正午前、沼田国民学校に行き。いくつかの団体に混ざり整列しながら放送を待った。時刻になり、天皇陛下の声が拡声器から流れてきたが、聴きとりにくくもあり、小学生が理解できる内容ではなかった。宿舎金剛院に戻り、山路先生が「今の放送は日本が敗けたことを天皇陛下が国民に知らせたのだ」と話された。

まさか日本が敗けるなんて、頭の中が空白、思考停止状態になり、しばし静寂のときがあってから、どこからとなく起こった泣き声が波のように全員に伝わり、止むことがなかった。先生も涙を流されていた。親元を離れ一年間、日本が勝つと信じ、粗末な食事、不自由な生活・学習環境に耐えてきたことへの悔し泣きだった。

気分転換が必要だと判断された先生の、予定にはなかった「片品川に泳ぎに行こう」の一言で元気を取り戻した。川での遊泳中、飛行機が一機上空を通過した。前日までならば敵機の場合の機銃掃射を避けるため急いで灌木などの物陰に身を隠していたのだが、その日は違った。戦争は終わったのだとゆ

っくりと飛行機を見上げることが出来た。胴体全体に太陽の光をいっぱい反射させた実にきれいな飛行機であった。

私にとって平和の原点とも思える七十年前の忘れることのできない貴重な体験である。

石川　治美（旧姓大和田）（昭和二十二年卒）

板四小と言えば、私には姉の後を追って、校舎を横目に「三五の原」で姉の友達と夕暮れ迄遊びに興じた戦前の静かな情景が目に浮かびます。しかし板四小80年の歴史の中でどうしても省く事のできない事として、太平洋戦争があります。少しだけ、60数年前の事を想い出してみます。

私達第19期卒業生は板橋第四小学校という名前で卒業していません。何故なら太平洋戦争勃発年となる昭和16年４月の入学時に小学校が国民学校と改称され、昭和22年３月に板橋第四国民学校のまま卒業している為です。その後、アメリカの教育方針に従って国民学校は小学校に戻り、義務教育として新制中学３年制が創設され、私達は新制中学１期生として進学しました。全て新しい制度の戦中戦後の激動期のため、落ち着いて勉学に励む間もなく今日に至っています。

その間四年生の時(昭和19年)、東京の戦渦を避ける為、群馬県沼田市へ学童疎開をしました。未だ親の温もりの欲しい頃、学年ごとに各お寺さんに分散され集団生活が始まり、未だかって経験した事のない厳しい生活でしたが、幼いながらも「戦争に勝つ

迄は・・・」のスローガンのもと何事も我慢をし、友達同士助け合っての１年数ヶ月の生活でした。今思うに戦争の良し悪しは別にして、人生での貴重な体験を与えて頂いたようにも思えます。先日式典に参列させて頂き、生徒さん方が伸び伸びと成長され、はっきり表現できる姿に接し平和である事の幸福をつくづく感じました。

教育は時代の要請によって簡単に変えられてしまいます。どうぞ板四小80年の歴史と伝統を今誇りを持って次代に継承されますよう、そして世界中がいつまでも平和でありますよう祈念しております。

（80周年記念式典に参列して）

◎昭和19年８月板橋駅プラットホームに沼田行きの列車が板橋第四国民学校の三年生～六年生の児童を乗せて待っている。遠足に行くが如くはしゃいでいる私達、見送る、父、母、兄、姉、弟、妹、祖父母達の顔・・・戦禍を免れる為の日本国始って以来初の子供達の大移動です。家族はどんな気持ちで見送ったのでしょう。現在でこそ沼田の地名を知らぬ者は少ないでしょうが、幼き十歳達の初めての疎開地は山の上のお寺でした。

「駅前に地元の児童ら並びて迎えられし我が青白き顔」

遠足気分でやって来た沼田の街は駅前より山に登って行かなければなりませんでした。疎開の第一歩はハァハァ息切れの山登りから始まり、疲れ果てた姿と化してお寺（金剛院）に到着しました。

寺と云えば恐い所の代名詞、その日より本堂に住む実感なき私達はお夕飯（どんなご馳走だったか全然記憶にない）も済みホッとする間もないまま、東京方面を向いてお父さん、お母さん、先生、寮母さん、皆さんお休みなさいと挨拶して床に入る。そのうちあちこちより、シクシクの泣き声、先生寮母さんに慰められても大きな泣き声の合唱となり眠りについた。夜中ふと目覚めると、もぞもぞ動く布団多数あり、そのうち一人起きだすとつづいてゾロゾロ廊下に並んでトイレにまっしぐら、裏庭の竹藪がザワザワと大きくゆれ今にも何かが出てきそうで恐ろしかった。

新井　時枝（旧姓　羽田）（昭和二十三年卒）

第二次世界大戦勃発は入学前年の12月8日でした。学校で面接があり「どこと戦争していますか？」と聞かれた事を憶えています。

学校に通うようになり戦争が激しくなるにつれ、警戒警報が鳴ると理科室の防空壕に入り、静まると家に帰るのです。三年生になると集団疎開が始まりました。三年生が最小年でした。疎開先の上牧駅で迎えてくれた学生に導かれて旅館に行ったのですが、さぞ、おどおどしていたことでしょう。

終戦は四年生の夏でしたが、それまで体験したことの中でも、雪中行軍をし旅館にかえり、凍えた手を温泉に入れると痛かった事、鮮明に覚えています。今も小学校時の様々な事を懐かしい思い出としています。

古川吉夫（昭和二十三年卒）

昭和19年4月、太平洋戦争の激化で、東京も空襲されるようになったため、親、兄弟と別れ、群馬県の山奥、川場温泉の旅館で男子41名の集団生活が始まりました。紀陸先生と保母さんがあたたかく面倒をみて下さいました。毎日、学習の他に、寝具の始末、掃除、洗濯、それに食料不足とホームシックと、年10歳の私達には大変つらいことでした。

私達は「川場会」をつくり、亡き紀陸先生、疎開先の山市屋旅館の方達に感謝の念で、川場に集まり一夜を共にし、当時のことを語り合っています。

写真は、昨年の「川場会」のスナップで、奥様方も参加しています。亡くなった友、病気で不参加の友もいますが再会する日を楽しみにしています。

川場会の方々。平成15年川場健康村

塩野　俊夫（昭和二十一年卒）

昭和19年、5年生の時（戦時中）縁故先疎開で福島県会津の母親の実家へ一家で住む事に（母、父、兄弟3人で）、食料があまり無くたいへんだった事を思い出します。しかって第四小は卒業していません。

何か、あの当時は学校というより、昭和電工という会社で働いた思いがあり、昭和天皇の終戦の詔勅を仕事場の外で聞きました。つらい思いの日々だった様です。昭和20年の11月母が亡くなり、増々きびしくなり、今度は父の実家がある埼玉へ…胸がつらいので……。

井上　智臣（昭和二十四年卒）

戦争が始まり生活物資が不足し、食料が配給制度になった昭和18年の春、私は「板橋第四国民学校」に入学した。担任は厳しい柳沢先生、二年は三森先生、この頃、警戒警報のサイレンが響くと授業を中断し生徒を帰宅させるようになった。類焼を防ぐため家屋を壊す強制疎開も始まり、道路には防空壕が掘られ疎開する家庭も増えた。

児童保護の国策「学童疎開」が実施された。二年の三学期末、2月の出発の日を今でも思い出します。朝リュックを背に坂道を集合場所の校庭に向かった。振り返ると父が遠くで手を振っていた。「再会出来ないかも」と、父は当時思ったそうです。

赤羽駅は疎開する学童で混雑していた。夕刻、沼田駅で先輩に迎えられ宿舎の舒林寺（じょりんじ）という寺に着いた。三年男子の宿舎だった。

朝のお経、少量の食事、シラミとの格闘、地元の沼田小学校にも通ったが、すぐ寺での勉強に変わった。畳に座る寺子屋学習である。当初は健康だった児童も痩せ細り、この状況が長く続いたら栄養失調になったであろう。8月15日の終戦を寺の本堂で聞きずらいラジオを囲み皆で知る。

やっと10月23日板橋の駅に立ったとき、本当に嬉しかった。残った三年男子は4名であった。駅は焼け、見渡す限りの焼け野原、学校は跡形もなく焼け、土台石と防火壁だけが残っていた。その校庭で解散式があり帰宅した。戦争は二度としてはいけない。平和な世界が続くことを願わざるを得ません。

同窓会20年の歩み

☆1997 年　秋　　同窓会設立の動き

☆1998 年 12 月　　同窓会発会式
（70 周年記念式典にて）

祝辞を述べる高橋将昭さん
昭和 24 年卒

挨拶される野澤 豊校長先生

☆2000 年 6 月　　「第１回総会」開催

☆2001 年度より　　卒業生に記念品贈呈

☆2004 年 6 月　　同窓会だより「第１号」発刊

☆2004 年～2008 年　6 年生社会科の授業で
「戦時中の体験談」語る

☆2008 年 11 月　　「80 周年記念事業」として
※テントを二張り寄贈
※在校生に鉛筆セット贈呈
※資料室の充実
会員から提供された物を資料室へ寄贈。

☆2009 年度より　　新入生に記念品贈呈

☆2009 年 6 月　　会則改定(第 10 回総会にて)

☆2009 年 8 月　　沼田市主催「学童疎開物語」に
“かたりべ”として参加

☆2010 年 6 月　　「第1回板橋史跡めぐり」開催
（第 11 回総会時）

☆2010 年 12 月より　「放課後補充教室」に協力

沼田市ホームページより。

☆2012 年 9 月

「改修工事完成報告茶話会」の開催

新しく生まれ変わった校舎や校庭を板四小に関わりのある方々に、披露することが出来ました。

☆2013 年より

「同窓会だより」10 号よりカラー化（縦組みに!!）

「同窓会だより」全面リニューアルしました。
カラー印刷、紙面構成が一新されました。

☆2014 年２月

「新型プロジェクター３台」寄贈

「公開授業」「研修」等を見学し、ＩＴ機器特にプロジェクターの大活躍を知るとともに新・旧機器の性能に大きな違いがあることも実感しました。

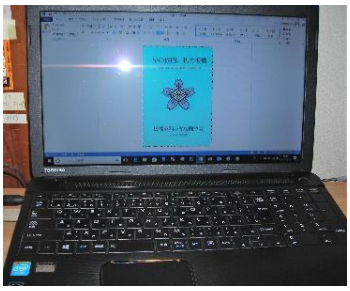
☆2016 年 2 月

「ホームページ開設」仲間ともっと交流を。

出来るだけ新しい情報や話題を提供出来るよう努めています。「お気に入り」に登録してご利用下さい。

☆2018 年 4 月

「記念誌」の発行《私の板四、私の板橋 》（A５判・64 頁）



「学校生活」「地域の街並みや遊び」「疎開」「同窓会 20 年の歩み」で構成されています。
HP でも記念誌**「私の板四、私の板橋」**をご覧頂けます。

同窓会設立を振り返って

嶋田　功（昭和22年卒）

平成九年春、国民学校を卒業し五十年ぶりに母校で同期会を行いました。そこに小川脩校長がお見えになり「来年(平成十年)伝統ある本校の創立七十年を迎えます。多くの卒業生をお招きしたいのですが、残念ながら同窓会がありません。何方か作って頂けないでしょうか。」と挨拶されました。同年秋、母校を訪ねましたが、小川先生は亡くなっておられました。その時、私は先生の『一言』を重んじ、同窓会を作る決意を致しました。

各新聞の同窓会欄に呼びかけ、また、近隣の町会長の協力を頂いたり、各同期会幹事の方を探したりして名簿作りに奔走し、案内状二百七十枚を郵送しました。その結果、平成十年、創立七十周年記念式典に八十八名の同窓生を迎えることが出来ました。式典終了後、壇上から同窓会を作ろうと呼びかけ、多くの賛同を頂き、それが事実上の同窓会発会式になりました。

平成十二年六月四日、当時の区長、近隣の町会長をお招きし、初代会長森田哲夫氏の下、第一回総会の開催に漕ぎつけました。どれだけの方が参加して頂けるのか不安でしたが、二百名を迎えた会場は溢れんばかりの賑わいを呈し、車椅子の方の参加もあ

り、同窓会を待ちに待ったかのような光景に、有難く目が潤む思いでした。陰でご協力頂いた岡本進（当時ＰＴＡ会長）氏に感謝。

会を重ねる毎に定着し、新卒者を招き校歌を元気な声で斉唱し、新旧同窓生の交流も図るようになりました。一昨年と昨年は小関哲之副校長がヴァイオリンの伴奏で校歌斉唱を盛り上げてくださいました。

此の十年の間、多くの方からご芳志を賜り、それが創立八十周年に際し、学校、在校生に記念品を贈呈することに繋がりました。なお、八十周年祝賀会場において、学校から『感謝状』を賜りました事もご報告させて頂きます。厚くお礼申し上げます。

また、旧職員の会「板四会」も発足されました。これらの会はＰＴＡも応援して下さいます。温かく和やかな同窓会です。今まで一度も来られない方でも，直ぐに馴染めます。是非参加してください。

森田哲夫（昭和十年卒）

同窓会だよりの題字の中に会の意味が色々と含まれているようなので、題字について好奇心にかられ調べました。蛇足ながら書き記してみます。

まず「同」の字は両側から手を差しのべて酒瓶を持ち上げること。そして大地に酒を注ぐには「力を合わせよ」と言う意味だそうです。次に「窓」、宙（そら）の字に似ています。屋根に天まどをあけて天空を、お星さまを見るの図。今の字は下に心を添えて書きます。心とは命にかかわる大事な心臓の姿を形

づくっています。古くから人の思考力は心臓から出るものと思われていました。ですから「心からお礼を申す」…とは思い考える限りの感謝を表す言葉となったのではないかと考えられます。

「會」の字は、みんなで持ちよった食材料を鍋にほうり込み、蓋をして下からずくずくとゴッタ煮をしてみんなで食べ合うと言う意味ですから、「大勢の力が集まって」會を盛り上げようと言う意味だなと思った次第です。「同窓会」を大いに盛り上げて下さい。（平凡社　白河静著　「常用字解」より）

同窓会への思い

高橋　将昭（昭和二十四年卒）

私たち24年卒、昭和11・12年生れ、七十二歳２２０名の心を込めた話をしましょう。まず、いま平成21年の状況は２２０名卒業の内、連絡のとれる同期生１００名。通信文を送れども、無反応同期生５０名、物故者２名、残る１１８名は有志が懸命に探しましたが不明者です。長い時代の流れで移転先のわからない同期生、悲しくも亡くなった同期生などです。

先生方も、ご存命の並木先生、渡辺先生。亡くなられた五味先生、長谷川先生、丸山先生、いつも元気で来てくれる矢田礼子さんのお父さん山路先生。連絡が取れませんが懐かしく思い出される卓球がうまい入江先生、弟が同級にいた杉本先生、何時も明るい天野先生、マッチ売りの少女を読んでくれた塚田先生などの先生方が“私のふるさと板四小”同窓会に参加してから鮮明に浮かんできました。

今72歳になっても、同期生は無論ですが当時の先生方がして下さった多くのことが思い出されます。入江先生は小生を可愛がってくれまして、小生の高校時代の体育祭に来てくれました。あのときは、先生がどうしてここにいるんだろう?と思いました。今は嬉しく、懐かしく先生と再会が出来ないかなぁ…と思います。

『私のふるさと板四小』ほとんどの同窓生は、この地で生まれ、この地で育ちました。現在も居住している同窓生も、板橋を離れた同窓生も、この感傷で戻ってくるのです。

同窓会会場の情景や幹事会の会合、地元での飲食、買い物、曲がり角や路地の匂い、見上げる大樹、石神井川のせせらぎと大木の桜、金沢橋、当時の近所の人々、先輩、後輩、男女、好きだった人、長い長い時を流れて甦ります。小生は突然《いゃ～タカハシ元気だなぁ》の声を聞いたとき、帰ってきたなぁ～と、ほろっとした感傷に浸ります。

奉仕の心を以って同窓会・同期会・クラス会・グループ会があります。いずれも幹事の方の情熱次第です。社会奉仕、地域奉仕は現代社会を支えます。

同窓会に参加して　大橋　勝廣（昭和二十九年卒）

去年の同窓会に出席いたしました。昭和29年卒の同期は、私を含め二人きりの寂しい状況でした。私は地元ですが、もう一人は遠く山形からきていました。地元に残る者が集まって歓迎してあげられなかったのが残念です。彼は社会に出るときに山形放送

に就職し、その地で家庭を持ち、ずっと活躍してこられ以後も山形で過ごされるとのことです。

誰に会えるか、幼き日の思い出は残っているだろうかと、何かを求めて彼は来られたのか知れませんのに、月山の春スキーや山形ソバの話などで楽しんでしまいました。でも、私一人でもお会いできて良かったと思います。

会場は、卒業したての初々しい後輩から、その祖父母の年齢の人まで体育館がほぼ一杯になる様子に、役員の方々のご努力が察しられます。ご苦労さまでした。寂しい思いをする同期の人が無いように、出来る限り出席し続けたいと思います。

本間　貞夫（昭和三十一年卒）

卒業して60年以上になる今も、同窓会に関わったご縁で母校を訪れる機会があり、その度に自分のルーツを確認する思いです。小学校時代を含む板橋在住の10年間はまさに「私のふるさと板四小」に当たります。母校の存在に感謝です。

伯耆原厚雄（昭和三十一年卒）

同窓会に関わって13年、「同窓会だより」も大きく変化しました。毎年編集には悩みますが、今となってはいい想い出となっています。何より支え合う仲間たちがいます。大事にしていきたいと考えています。今年は、ホームページにチャレンジしていきます。上手くいきますかご期待下さい。

Ｖｉｖａ！「私のふるさと板四小」

坂井　寿夫（昭和三十四年卒）

私達同期は昭和33年６月落成した「鉄筋３階建」の真新しい校舎で学び、翌年２月「創立３０周年記念式典」に出席しました。

あれから６０年の月日が経ち、来年は「創立９０周年」です。当時の新校舎も５年前、大規模新改修が完了して校庭にグリーンのソフト芝生を絨毯のように敷き詰めたモダンな学び舎へ！

平成30年３月末までの卒業生（同窓生）も一万二千三百余名に！　９０年の歴史と伝統を改めて感じております。後年発足した「同窓会」も同時に「２０周年」記念総会を迎えます。

年に一度「私のふるさと板四小」を訪れ懐かしい顔や新しい出会いを楽しめるのも「母校」があればこそです。母校の存在に感謝！

少子化の影響で小学校の統廃合が進んでおりますが、六年間の貴重な思い出・希望・夢などが多く詰め込まれている「私のふるさと板四小」がこれからも　末永く存続して欲しいですね。多くの同窓生とともに元気よく「９０周年」「２０周年」をお祝いしたいと思っております。

◎「放課後補充教室」に参加して

★同窓会は「会員相互の親睦・母校板四小の応援団・地域社会との共生」を目的に発足しました。

設立１０周年を経て「同窓会運営」も安定化、「母

校応援団として何かできることはないか？」との思いが・・・・。

当時の田尻校長先生から「児童の基礎学習をより確実にし、より学力向上を図るため『放課後補充教室』の先生お願いできないか？」との協力依頼を受け「学習支援＝補充教室ボランティア」活動が平成22年秋スタートしました。当初は毎日各学年１０名前後の児童を先生一人・同窓会会員一人(協力会員は５名)で指導する環境でした。現在では先生方も３名に増員され、不定期ですが大学生・北園高校生の協力を得て、指導体制も充実しております。

★教室の雰囲気を一部紹介します。

担任の先生から個人ごとに与えられた算数・国語の課題にチャレンジする児童をサポートしております。

「〇〇君何ページ進んだ？ライバル心旺盛なＡ君→負けずに頑張れ」「寡黙でこつこつ頑張り屋のＢさん→良いね、この調子」「今日はやや集中力に欠け、落ち着きのないＣ君→何があったのかな？気になるな」「(問題が解けた時に) 嬉しそうな表情を見せるＤさん→自信ついたね。先生も嬉しい」「(私が少し考えていると) 先生わからないの？と嬉しそうなＥ君→チョット難問だね！先生も勉強しなきゃ(冷や汗？)」「時間ギリギリに猛烈なラストスパートで課題に取り組むＦ君→次回からはもう少しス

タートからダッシュしてみようか？」

可愛らしい後輩に昔の自分を見つけ、小学校生活を懐かしむとともに、孫世代の感性・感覚に戸惑いを覚え乍ら一緒に学習を楽しんでおります。中学の制服姿の卒業生(同窓生)に小学校周辺で出会い「先生、補充教室有難うございました。中学で頑張っています。」と笑顔で挨拶されると、「ガンバレ！」と応援しながら「補充教室に参加して良かった」と幸福を感じる瞬間に感謝です。

★平成28年の春に実施された「国語・算数学力調査」の母校の結果は、板橋区・東京都・全国の平均正答率を全ての項目で上回っておりました。校長先生をはじめ学校関係者の継続的授業改善、児童の学習への真摯な取り組み姿勢が成果の賜物ではないでしょうか。私たち同窓会会員のお手伝いが少しでも貢献しているとうれしい限りです。

★同窓会会員の先生が「常時二人体制」になると、よりきめ細かいサポートができます。ボランティア活動に関心のある会員の皆様「補充教室」を一度体験されては如何でしょうか？月一回の参加でも大歓迎です。

同窓会に出席して

豊田　毅（昭和五十年卒）

昨年、私は同窓会にお招きいただき、初めて出席させていただきました。会場では、４年生時の担任でお世話になった塚田正宏先生にお会いでき、当時の思い出や、近況などの話に花が咲きました。他にも私が在籍時の先生や、近隣の方々が多数お見えに

なっていましたが、皆さん歳はとっても、大変お元気で、何よりお一人おひとりの顔が本当に楽しそうで、盛り上がりの多い会でした。私と同級の参加者が見当たらなかったのが残念でしたが、閉会後は、幹事の大先輩方が手際よく後片付けに動かれていたのを大変印象深く覚えております。岸会長、嶋田事務局長を始めとする幹事の方々、運営ご苦労さまでした。会の益々のご発展を祈念いたします。

25年ぶりの母校

植田康嗣（昭和五十八年卒）

板四小を卒業して以来、25年ぶりに訪れた母校には我々の卒業記念の作品がいまだに展示されていた。あまりの懐かしさと嬉しさが頭の中に当時の思い出をぼんやりと浮かばせてくる。ほどなくして自分の作品を探し当てるとさらに当時の思い出を鮮明にさせてきた。あたりを見渡すとあの頃と同じ校舎と校庭。一緒に学び、遊んだあの時の仲間達はどうしているのだろうか？そしてあの時の先生方は皆さんお元気だろうか？当時は学年で４クラスあったのでおそらく１５０名近くの生徒数だったと思う。

板四小が一昨年に創立80周年を迎え、記念式典に参列させていただいた。その席で板四小同窓会が発足している事をお聞きし、さらに毎年体育館で総会を行っているとの事、同窓会だよりを拝見して当時の先生も参加されている事を知った。

このような素晴らしい会の発足にご苦労された先輩方に深く感謝し、あの時の仲間達と先生方とで

卒業記念の作品を一緒に見に行ける日を今から楽しみにしている。

「同窓会員が戦争時の体験を授業で語る」

総合的な学習の時間「今、伝えたいこと」戦争中の板四小の様子を聞こうという六年生の授業が平成16年10月25日に行なわれました。同窓会に戦争中に小学生であった先輩に体験を話して欲しいとの要請があり、20年卒の龍田幹雄氏、22年卒岸孝夫氏、嶋田功氏が話をされました。

以下に、授業を受けた六年生、先生及び話をされた、龍田氏の感想を紹介します。

学童疎開の体験を語つて

龍田幹雄（昭和二十年年卒）

昨年10月25日に、板四小に招かれて6年生全員に太平洋戦争中の学童疎開を中心に話をしました。戦時中の学校生活は、現在とは異なり軍隊式教育のため厳しく規律を重んじる生活だったので、感想文でも関心を示した生徒の数が多かったと思います。

ただ、学童疎開中の生活を写した映像や写真が無い為、話だけの説明になってしまい、疎開生活のひどさを具体的に理解させるには一寸不足したような感じでした、又、50分の持ち時間の中で3人で話した為、時間の不足を感じました。

「生徒の感想」

六年生43人の感想より一部抜粋

◎授業で習ったように戦争とは凄まじいものだということが改めてよくわかった。尊いたくさんの命が失われます。誰も戦争を止められなかったのか。話し合いで解決できなかったのか、国民は心の中でそう思っていたのではないでしょうか、……これからは戦争体験を私達が語り継がなければならないと思った。

◎今の学校の決まりとすごく違うのに驚いた。（奉安殿に最敬礼、男女別クラスや登校等）…板四小の歴史は絶対に忘れてはいけないと思う。当時の子供達や先生方のつらさや悲しみを知り、これからは人々にこんな思いをさせてはいけないと私は思うから。

◎親から離れてお寺ですごさなければいけないのはつらかっただろうなあと思いました。今、お父さん、お母さんは大丈夫かなあと心配になっていた人もいたと思います。自分が通っていた学校が焼けてしまうのもとても哀しいだろうなあと思いました。私達は戦争で亡くなった人達のためにも戦争が二度と起きない社会にしたいと思います。

◎登下校の時、天皇の写真にきちんとあいさつするというのにびっくりしました。私はこんなことが毎日続くと学校に行きたくなくなるけどそのころはそんなことを言っていられるような時代じゃないので、生きている人はえらいと思いました。

◎パーマネントをしてはいけないのは、おしゃれをしたい女の人にはつらかったと思う。白米が食べられなく、すいとんや、まぜごはんばかりなんて、私はがまんできないと思った。シャケがごうかなおかずなんてびっくりした。いただきますの前にあんなことを（兵隊さんありがとう。お百しょうさんありがとう。お父さんお母さんありがとうと言う）なんて私はいや。今の四小はとてもきれいだから空しゅうで全焼したなんて考えられなかった。

◎戦争中疎開をしてすごいがまん強さだと思いました。話

を聞いただけで戦争はどれだけ苦しい生活をさせたかわかりました。低学年の子供達が大人達を注意する（おしゃれをやめさせる）のはすごいと思った。戦争が終った今、どれだけいい生活をしているかもっと考えて平和になった今を大事に生きたいと思った。戦争は被害がでるだけでいいことがないので平和な世の中にしていきたい。

◎今の時代はすごくぜいたくをしているのがわかりました。おなかをこわす食べ物をぼくだったら食べないと思います。けれどそうするとみんなにいじめられちゃうんだと思いました。

◎おいしくない食べ物を食べて、おなかをこわすぐらいなら食べたくないと思いました。でも戦争中の子供は食べなかったらおなかがすいて死んでしまうと思います。さつまいもや豆のごはんは食べたことがあるけれど戦争中はきっと量も少なく、おいしいものではなかったんだと思います。

◎私だったら朝、御真影におじぎをするのは少しいやだし、朝会があるたびに歩かされるなんて、志村坂上などそんな長い距離はぜったい無理だと思うのに昔の板四小の生徒はとてもすごいし、がんばっているし、がまんしていたんだと思います。

◎戦争中の学級生活は決まりがとても多く感じました。弁当もごはんと梅干しだけと聞いてたべる物も制限されて可愛そうだと思いました。空襲の時無事生き残った事自体がすごいと感じました。歴史で日本は神がつくった国だとありえない事を教育されていたなんて信じられませんでした。戦争で関係のない多くの人が被害にあったのはとても悲しい事だと思いました。

◎友達が死んでも悲しい、日本は戦争しないで平和になろうという考えが一つもなかったのだろうか、あってもいいはずだ。

担任の感想

六年担任　黒岩昭里先生

子どもたちが真剣に同窓会の方々のお話を聞く姿を見て、実体験に基づいた数々のエピソードを身近なものとして受けとめていることを感じました。戦争のことは本やビデオや教師の話でしか知らない子どもたちが、自分たちと同じ小学生の時に戦争を経験した先輩方の話を興味深く聞いていました。この機会がそれからの学習に大いに役立ち、「ぞうれっしゃがやってきた」の劇発表のベースにもなったことを付け加えておきます。

六年担任　山田雅子先生

「日本が戦争をしていた時代があった」ということを知らない子が多くなりました。教師にも、戦争を体験した人はいない時代になりました。社会科で学習しても、どこかの国の絵空事のように感じている子が多いようです。

同窓会の方にお話を伺い、板四小にも空襲があったのだということ、疎開をしたことなど知り、戦争は自分たちの身近なところにもあったのだということを、子どもたちは改めて実感したようでした。

沼田市都市間交流事業「板橋区集団学童疎開物語り」に参加して

岸　孝夫（昭和二十二年卒）

グリーンベルという商業施設に特設会場が設けられ、板橋区郷土資料館提供の学童疎開を含めた写真パネルや焼夷弾などの戦災遺物が展示されている中で行われました。

ＦＭ尾瀬のアナウンサーの司会で、午前中は沼田

小学校六年生７２名、午後は一般の方（年配者が多い）約７０名を対象に、まず、岸が集団疎開全般について、次いで同期生の女性（白井さん、遠山さん）が疎開中の具体的なエピソードの紹介、最後に嶋田さんがまとめをとの順序で体験談を約１時間弱話しました。思ったよりも話の連携が上手くゆき、自己採点で８０点は堅いのではないでしょうか。

その後、質疑応答の時間を３０分ほどとりました。午前、午後ともに質問、意見、感想が切れ目のない状況で続き、そのことだけでも交流事業としての意義は十分あったと思われます。

小学生の質問は板四小の児童と同じく粗末な食べ物の内容に集中しました。

一般の方のなかには、お世話になった三光院や金剛院の縁者の方も参加され、親御さんから聞かれた食料調達の苦労話などが披露されました。また、私どもの１年上に疎開先から沼田の在に養女に入った方（故人）がいたことや、その娘さんが参加されていたり、板一小の疎開先の観音寺から当時使用していて１枚だけ残った皿の資料館への寄贈を頼まれたり、この機会がなければ話されないようなことが多々ありました。沼田小は沼田城址にあるため敷地が広く、直線１００メートルのトラック、２階の廊下は直線１８０メートルというたまげたもので、木がふんだんに使われている都会では考えられない校舎でした。板四小の児童と同じく、きちんと挨拶ができて、すがすがしい気分で訪問を終えました。

（学校への報告文から一部抜粋）

板四小同窓会20周年記念誌
「私の板四、私の板橋」
第一版　平成三十年四月発行・五〇〇部
企画発行／板橋第四小学校同窓会
編　　集／板四小同窓会「周年部会」
印　　刷／プリントパック